

第22回新潟高血圧談話会

日 時 平成8年11月22日(金)
午後6時より
会 場 新潟大学医学部有壬記念館
2階大ホール

I. 一般演題

- 1) 当科における高齢者の高血圧治療
—Ca拮抗薬の使用状況と悪性腫瘍合併
を中心に—
青池 郁夫・荒川 正昭(新潟大学第二内科)

【はじめに】

高齢者人口の増加により、高血圧を呈する高齢者は増加傾向にあると考えられる。今回、当科における高齢者高血圧患者の治療状況について調査、検討を行ったので報告する。

【対象】

当科の高血圧・腎外来(1回/週:金曜日)を1994年4月から1996年9月までの間に受診した283例につき検討を行い、降圧療法実施1年未満の症例、腎不全症例、Life style modificationのみの症例などを除外した172例について解析を行った。

【結果】

解析対象172例は平均年齢60±14歳(19~92歳)で、高齢者群(65歳以上)は67名(39%)であった。若年群、高齢者群の治療状況は各々、収縮期血圧143.2±14.5 mmHg/141.2±13 mmHg(NS)、拡張期85.8±9.8 mmHg/79.1±9 mmHg(p<0.0001)と高齢者群において拡張期血圧が低かった。血清Na, K, 心胸比などには差が見られなかった。高齢者群でのCa拮抗薬、ACE阻害薬、利尿薬の使用状況は、単独療法46.3%、2剤併用23.9%、3剤併用10.4%、その他の薬物療法19.4%であった。高齢者群においてCa拮抗薬の服用履歴は73.1%に達し、服用継続率は64.2%であった。

このように高齢者においてCa拮抗薬は多く、また、広く使用されているが、'96年になり、PahorらがCa拮抗薬による発癌の危険性についてAm J Hypertension, Lancetに報告している。今回の検討で解析対象となった173例中、降圧療法開始後に悪性腫瘍の合併をみた8例(4.6%)について検討を加えた。症例は若年群3例、高齢者群5例であった。悪性腫瘍の種類は、肺癌2例、

胃癌2例、膵臓癌1例、急性骨髄性白血病1例、腫瘍マーカー異常2例であった。高齢者群では5例中4例がCa拮抗薬の単独服用で、平均服用期間84.8ヶ月であった。

【まとめ】

- 1) 高齢者高血圧症例の73.1%でCa拮抗薬を服用したことがあり、64.2%は服用中であった。
- 2) 全悪性腫瘍合併例でCa拮抗薬を服用しており、単独療法が75%、ACEIとの併用が25%であった。
- 3) Ca拮抗薬は降圧薬として組み込み率が高く、多くの症例に検討されているが、今回検討した症例数は少なく、コントロールスタディーではないため多剤との比較は困難。
- 4) 今後、正確な疫学調査が必要。

2) 高齢者の降圧治療の問題例

高橋壮一郎(見附市保健福祉医療センター)

高齢者高血圧の特徴の1つに、合併症を伴う例が多いことがあげられる。頸動脈粥状硬化例も少なくない。しかし、30%以上の内腔狭窄例は少ない。今日、頸動脈狭窄の著明な男性で、脳梗塞により死の転帰をとった1例と抗凝血療法によって、TIAをくり返しながらも生存している1例を紹介し、併せてストレスによる血圧上昇(白衣高血圧を含む)、夜間血圧についても言及したい。

症例1は75歳、昭和51年5月4日、嚥下障害で長岡赤十字病院に入院加療後、高血圧とNIDDMでA先生の外来に通院していたが、通院困難となって平成7年6月12日、当科に紹介状と共に受診した。同年8月7日頃より、右手脱力その後進展して右半身不全麻痺、Broca失語も出現、8月11日に再来、即入院した。白衣高血圧があり、外来時の血圧は160~200/80~100 mmHgであった。

症例2は88歳、既往歴にTIA、狭心症がある。某病院で加療されていたが平成4年12月6日、右上肢不全麻痺で当科外来を受診した。12月8日、同症状とせん妄で第1回目の入院、その後計8回の入退院をくり返している。左頸動脈のbruit著明、右頸動脈の血流は測定不能。降圧薬は平成6年夏まで使用していたが、その後は中止。第1回目の入院時より、チクロピジン、ワーファリンによる抗血小板、抗凝固療法中である。

有効かつ強力な降圧薬が使用できる現在、血圧上昇による脳出血や脳症の予防から動脈硬化(粥状硬化、細小動脈硬化)、動脈壊死、およびその結果としての血管障